

続く令和の米騒動

昨年夏ごろから顕在化してきた「令和の米騒動」は、その後も米不足が続く、これに対応して今年の3月には政府備蓄米が入札によって放出された。ところが5月、江藤農水大臣が失言問題で更迭。小泉進次郎氏が新農水大臣に就任すると同時に、政府備蓄米の放出は随意契約に変更。これにともない約半値となった古米の政府備蓄米を購入するために、スーパーに列をなす皆さんの消費者の姿が、連日のように新聞・テレビ等で報道されている。

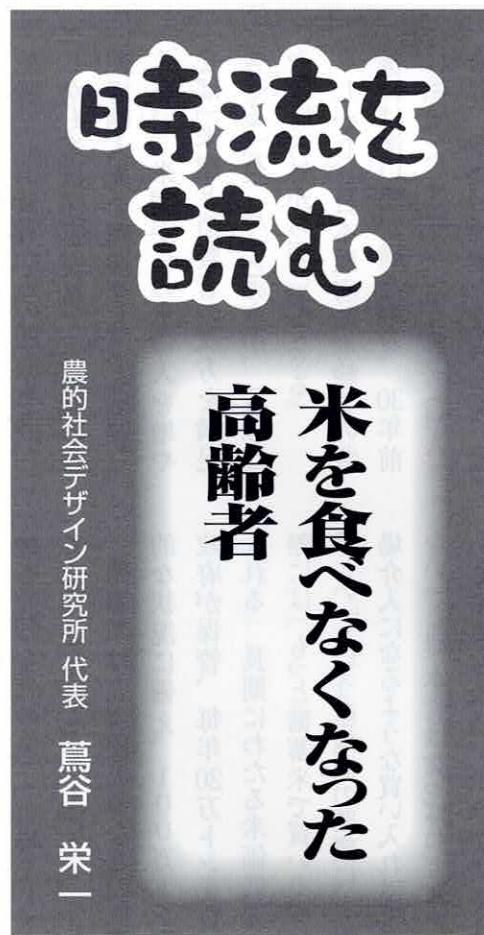
際立つ米の割高感

このように米不足が続いてはいるものの、近年の米をめぐる情勢には変化も見られる。今後の米政策を考えていくにあたってこれらに留意しておくことが必要でもあり、ここで確認しておきたい。

第一がご飯の値段とパンの価格の推移・比較である。米騒動が発生した当初は、食品全般が値上がりする中、パンや麺等に比較して米は割安

感があつて購入増、消費増につながっていた。それが騒動が続くほどに米は値上がりし、かつ上昇幅が著しい。ご飯が1膳2023年4月で約30円、パンが4枚切で約42円だったものが、25年2月にはご飯が約57円、パン48円となっており(三

工品の1人・1日当たりの摂取量である。総じて減少傾向にあるが、その中で比較的安定的に推移しているのが20歳代で、一番減少が著しいのが60歳代となっておりと同時に摂取量も最も少なくなっている(農水省資料。以下



変わる高齢者の食

第二が、年齢階級別の米・米加

菱総合研究所資料)、価格は完全に逆転してご飯の割高感が強くなっている。消費者の米離れを懸念する声が出るのもうなずかれる。

同じ)。

別途、世帯主の年齢階級別の「弁当」及び「おにぎり・その他」の年間支出金額(2人以上の世帯)を見ると、支出金額は50歳代、60歳代がほぼ並び、29歳以下は最も少なくなっている。あわせて「他

のパン」及び「調理パン」の年間支出金額を見ると60歳代の増加が最も著しい。

これを見ると高齢世代は米の摂取量を減らしてパン食に一部シフトながらも、価格の高いブランド米を購入し、若い世代ほど低価格米を志向していることが見て取れる。これは家計の余裕度合の違いもあるが、高齢世代は米そのものの味を重視するものが多いのではない。これに対し若者世代では米離れというよりは、肉等がメインとなり米の副食化がすすんでいるようにも推測される。

欠かせない食生活のあり方議論

政府は2027年度から水田政策を見直すことにしている。食料安全保障の確立には、食料自給率の向上が必須であり、適地適作の水田稲作をいかに守っていくかが最重点となる。人口減少も加わって米需要量の減少は必至であるが、あわせて食生活のあり方についての議論も欠かせないようだ。